

20年目の子ども村の新しい展開をふりかえって

～20年間の「子ども村」を振り返える～

2014年11月19日
子ども村プロジェクト
代表 柳田 茂樹

はじめに

1994年、「子どもの権利条約」が国内批准された年の夏、イタリアへ旅行した時のことです。ペローナという町で若者たちの率いる楽しげな30人くらいの子どもたちに出会いました。

イタリアの子ども村の子どもたちだったのです。長い夏（3ヶ月）のバカンスを彼らは、ボランティア（アルバイト）のアニマトーレ、アニマトーラ（青年指導員）たちと、ゆつくりと楽しみながら避暑地で遊んでいるのでした。

私は、それまで、子ども劇場という団体で、3泊4日位の「子どもキャンプ」を1972年から毎年夏に経験していました。

ある子どもが「ずーっとキャンプ場にいたいなー」「帰りたくないなー」とつぶやいていたのを思い出し、子ども劇場のお母さんたちと“ゆとりと喜びのある子ども時代の生活”ってどんなものなのだろう。“日本の子どもの忙しさ”を何とかしたいなと思っていた矢先だったので、“せめて夏休み中、子どもたちが楽しいキャンプができればいいな”と思い、九州に戻って子ども劇場のみんなに話しました。

そして、翌年1995年、九州沖縄子どもの文化学校の大切な活動として、九州沖縄8県の子どもと青年が集まって、第1回子ども村はこうして生まれました。

子ども村のはじまりとあゆみ

「子ども村」は、宮崎県都城市岩橋市長のウェルネス健康循環都市づくりの一環で絶大な後押しをいただき、教育委員会を通じて、野生の鹿たちが住む、霧島国立公園内の御池小学校をご紹介いただき、1995年8月第1回子ども村（10日間）をスタートしました。また、熊本県企画開発部地域振興課（その後地域政策総室）の紹介で、熊本県清和村の小学校廃校跡を子どものために有効利用してほしいと、翌1996年以来、南阿蘇の広大なパノラマに囲まれた新しい廃校跡を拠点に、2000年まで、「夏の清和子ども村」として開催してきました。村からの支援、地元の農家の方々から新鮮でおいしい野菜、また様々な農業体験などの機会を提供いただくようになり、だんだんとソフトが育ってきました。

1988年から3年間、文部（文部科学）省「子ども長期自然体験村事業」委嘱を受け、子

ども村の内容も一段と充実する機会となりました。また、この年から、NICEという国際ボランティアネットワークの若者たちからご協力を申し出ていただき、これまで一緒に支えてくれた国内の青年指導員や子ども劇場の母親ボランティアの方々に加えて、世界各国からもボランティアの若者たちが指導員として参加してくれるようになり、子ども村の大きな魅力となっています。

この年には、熊本県立菊池農業高校馬術部のご協力で馬（ポニー）もお借りし、子どもたちの乗馬体験や動物とのふれあいも楽しみになりました。

2001年からは、特定非営利活動法人九州沖縄子ども文化芸術協会（こどもあーと）の事業として複数箇所開催をめざし、清和子ども村に加えて、はき子ども村（杷木町、宝珠山村、中津江村）を開始しました。2002年からは、拠点を子ども未来館・はきに移し、子どもゆめ基金からの助成を受けました。2003年には、菊池水源地域での開催を開始し、清和、中津江の3箇所で子ども村を実施しました。

2007年には、子ども村を専門に実施するために現「子ども村プロジェクト」を設立し、法人化を検討してきました。

2013年には、中津江と菊地で開催しました。

2014年には、新しい拠点として、日田市天ヶ瀬桜竹小学校跡地に移りました。

初めての場所でしたが、5年程度を目安に安全な施設を求めて、地元の方々のご協力をいただき、チャレンジできました。ほとんど毎日雨に降られ、安全な拠点が見つかったと実感しました。また、地元の盆踊りにも参加し、交流することができて、楽しい思い出となりました。施設のありがたさ、地元の方々の温かく協力的な雰囲気、温泉のある学校とこれまでの子ども村の中でも最高の環境となりました。

特に、あにまの体制と力量が大きく前進したのがよかったです。

参加者はこれまで20年間に通算46回、合計1,999名となりました。

子ども村の目的

子どもたちが親元を離れ、異年齢の仲間とともに、10日間以上長期に宿泊します。自由な時間と空間の中で、友情を育み、日頃できない自然体験、文化体験、生活体験をします。その中で子ども自身が主体的に活動し、自信や積極性を養うことを目的にしています。

子ども村でのとりくみの特徴は

- *子どもが主体的にとりくめるよう、応援します。
- *子どもの要望を尊重し、班ごとの生活をつくります。
- *子ども村全体を子どもたちが運営できるように配慮し、話し合いによって必要な役割分担します。（子どもの自治活動）

- *子どもたちの生活や体験活動を励まし「あにま（若いスタッフ）」と一緒に生活します。
- *子どもの関心や自主性を尊重し、多様な体験活動を用意します。
- *子どもたちの体験活動を、地域の専門家（きりり人）が援助します。
- *子どもたちが自主性、協調性、忍耐力、社会性を養う機会とします。
- *地域住民の理解や協力体制があります。
- *子ども村では、世界の若者や子どもたちとの出会いを応援します。
- *子ども村は、子どもたちの創造的な文化活動を応援します。

子ども村のプログラム事例

2週間のプログラム（例）

日 程：8月5日～8月18日（2週間）

目 的：1994年日本で子どもの権利条約が批准されました。特に第31条「子どもの休息・余暇・遊び、文化的・芸術的生活への参加の権利」は今の日本の子どもたちに必要な権利のひとつと考えます。子ども村は、子どもたちにゆったりとした時間と思いっきり遊べる機会を提供し心身の発達をめざします。

方 針：子ども村では、生活、自然、農業、文化芸術、創造体験を重視し、子どもたちが、ゆったりした時間の中で、たっぷりとした体験をとおして、さまざまな人と出会い、自分を解放し仲間の中で育ちあっていく過程を大切にしています。実施にあたっては、子どもたちの関心や自主性を尊重し、多様なプログラム、体制を用意、子どもたちが意欲的に参加、計画、実施できるように配慮し、子どもたちの自治を援助します。

参加者：34名（小3～中3）

	小学校 3年	小学校 4年	小学校 5年	小学校 6年	中学校 1年	中学校 2年	中学校 3年	合計
B	5	8	7	8	2	3	1	34
男/女	2/3	5/3	6/1	4/4	0/2	2/1	0/1	19/15

プログラムについて（方針）

		AM	PM	(夜)
8/5	日		13:00/開村式チャレンジ宣言、オリエンテーション、テント設営、食事づくり	子ども村役場会議 あにま会議
8/6	月	9:00/地域挨拶、地域奉仕(公園掃除) *地域を知る、知ってもらう 10:00/竹食器づくり、	13:00/いかだづくり、川遊び 各班会議、子ども村全員集会	*基本的に役場とあにま会議は毎晩開催
8/7	火	9:00/ (バス) 阿蘇登山 ンプ (バーベキュー)	温泉、菊池水源 1 泊キャ	子ども企画会議 *必要に応じて開催
8/8	水	9:00/乗馬体験*馬との接し方・世話・乗り方を各班ごとに体験する 15:00(バス)中津江キャンプサイトへ戻る		
8/9	木	10:00/木・竹・蔓を使った遊具づくり、川遊び、	魚のつかみ取り、串焼き体験、川遊び	
8/10	金	9:00/酒呑童子登山と 10キロメートルマラソン 15:00		
8/11	土	つり川遊び、文化交流体験 *海外の文化、言語、遊びを知ろう	13:00/文化体験ワークショップ・発表・交流 19:00 *子ども村の歌をつくらってみんなで歌おう	
8/12	日	10:00 (バス) 丸蔵地域へ移動、地域文化祭に参加、交流。 丸蔵体育館宿泊 (バーベキュー)		
8/13	月	子ども企画のあそび	13:00/ (バス) キャンプサイトへ戻る	
8/14	火	9:00/ソーセージづくり 15:00 *班ごとにひき肉作りから仕上げまで体験する		
8/15	水	9:00/鯛生金山博物館見学 *ハイキング	12:00/燻製作り 17:00 *ソーセージやいろんな材料で燻製をつくらう	
8/16	木	班活動	子ども企画のあそび	
8/17	金	つり川遊び、地域奉仕・労働体験(竹林整備) *お世話になった地域へお礼をしよう	子ども企画のあそび	
8/18	土	荷物片付け、テント撤収、閉村式		

全体のプログラムは前半に実施、子ども役場や子ども企画会議を開催し、キャンプ後半に「子ども企画のあそび」を実施する。

*川遊びは、できる限り毎日する！早朝のつりや虫取りは指導者およびあにまとともに実施。生活：班の生活基盤は男女各 1 張のテント及び食堂テント 2 張とテーブルイス、全体

のプログラム以外の食事は班ごとにつくる。洗濯は班の生活の中で空いた時間を利用する。お風呂沸かしは班交代です。

全体集会所および会議：山小屋 避難所及び本部：公民館。

あにまは、24時間子どもによりそって活動する。夜は男女各テントに1名が休み、残りのあにまは山小屋で休む。緊急体制の場合は本部と連絡を取り合って対応する。

子ども村の子どもたちから学んだこと

①子どもたちは、子ども自身がまるで自然の一部であるように、ゆっくりと時間をかけて、それぞれが持っている不思議な生命力を呼び起こして、変化していきます。

②子どもたちの日常では得られない、心身ともに総合的に触発する、多面的で感動的な深い体験が大切です。

③子どもたちは、自発的に関心を持ち、行動し、失敗し、発見（理解、納得）するという、自発と行動と失敗と発見の繰り返し可能なゆとりの環境が必要です。

④プログラムの進行より大切なことは子どもの成長であり、大人は押しついたり急いではいけません。

⑤子ども村では、現在言われているような子どもたちが遊べない、表現しないということではなく、時間いっぱい、一生懸命遊び、しゃべり、食事をつくり、はたらき、自分が知らないことにとっても関心があります。

⑥友達と慣れてのびのびできるまでに、初めての子は4～5日かかりますが、洗濯や片づけ以外は、何でも意欲的になるので、初見の行動や態度で偏見を持ったり、決めつけたりしないで、はげますことが必要です。

⑦問題が起こっても、異年齢の子どもたちは自治的に解決する力を持っています。しかし、子どもたちの中にも力関係や、意見の違い、経験の違いがあるので、子どもたちの仲間集団で起こった問題は、子どもたちが解決できると信頼し、ねばり強く励ますことが大切です。

⑧親元から離れて、1週間から3週間一緒に暮らした仲間は、とてもかけがえのない大切な友達になります。

⑨家庭内で過保護、過干渉な親に育てられている場合、自立心が弱く、大人に保護を求めたがり、子どもの集団の中に入りにくい場合が多く、大人やあにまに依存的な傾向が強く現れます。遅くとも小学校3～4年生までの間に、親元から離れて、子どもたちの集団生活の体験をすることは自立心を育てることになります。子どもを受け入れる際に、送り出す保護者や親の側の子どもへの関わり方をつかむことが大切です。

⑩子どもたちが、子ども村でたっぷりと体験したことは、家庭の楽しい話題や成長変化として、家族生活やコミュニケーションを楽しく豊かにすることが多く見られます。

⑪子どもたちの日常生活、特に、家庭や地域、子ども会、学校などで子どもたちの豊かな

生活体験、自然体験の機会を広げることが何よりも大切です。

⑫子どもたちの健康調査の結果、年々アトピー、アレルギー、学習障害などを抱えた子どもたちが増えていることは大きな変化です。日常の子どもたちをとりまく環境の汚染、食生活や生活リズムなど乱れ、過度のストレスなど子どもの環境全体を改善していくとりくみが求められます。

⑬農業や自然、文化などの子どもたちの体験活動の内容は、押し付けで無く、あそびを土台に驚きや楽しみとして計画することが大切です。その際、きりり人（体験指導者）とあにまの十分な連携をしておくことが大切です。

⑭子どもたちの体験活動を実施していく上で、親の世代も、子ども時代の生活体験、自然体験の狭さや経験不足の影響があり、世代を越えた異世代のプログラムを開発することも大切です。

⑮今後の活動を継続するにあたって、体験活動の理論化と同時に、体験プログラムの開発、インストラクター、コーディネーター、マネジメントなど、専門的な人材を養成することが急務です。

⑯子どもの体験活動が、現在の子どもたちに不可欠な分野であることを社会的にも理解されるよう国や自治体、教育関係機関などがさらに注視する必要があります。

⑰子どもの体験活動や教育を充実するために、環境に配慮ある施設（拠点）の整備が何よりも急がれます。

「あにま」とは

子どもとともに生活する青年指導員のことで、子どもの魂を活性化する人という意味で、2002年より呼称するようになりました。フランスなどでは、アニマトレー、アニマトーラという呼称があります。南ヨーロッパのアニマシオンという概念を土台にしています。私たちの子ども村では、子どもたちとともに寝食、活動をともにし、一緒に考えながら、子どもたちを励まし、子どもの自立と協働と自治を育てる、子どもに年齢の近い青年指導員のことを指します。

かつては、青年指導員、カウンセラーなどと呼んでいましたが、指導という意味が子ども村ではふさわしくないと考えるようになり、専門の体験指導者を「きりり人」と呼称すると同時に、2002年に改称しました。

現在では、毎年、海外、国内から多くの青年が「あにま」として参加しています。

「これからの子ども村は・・・」

今後は、子ども村の展開に大きな変化が訪れるでしょう。20年にわたる子ども村を通じて、かつての子どもの参加者が、子ども村青年スタッフとなってカムバックしています。海外から参加した若者たちとのネットワークも少しずつ広がっています。世界の子ど

もたちとの交流も始まってきました。

たっぷりと大自然の中でともだちをつくろう！子どもたちが、自然の中で心を解放し、生きている喜びを感じ、仲間との生活の中で楽しく人間として鍛えられ、自分らしさに自信をもって飛び立っていく。また、世界の若者や子どもたちとの出会いを通じて、ビッグな子どもたちが育っていく場になるでしょう。

「今の子どもたちに、すばらしい子ども時代を過ごしてほしい」と願っている方々は、とても多いと思います。

「人はされたように人にする」という言葉がありますが、やはり大人社会の生活、文化、環境が子どもたちに大きく影響をしていると思います。

子ども村は、決して、山奥にいくつか有ればすむことではないと考えるようになりました。そんな子ども村が日本いっばいに広がれば良いなと願っています。

子ども村は、決して、山奥にいくつかあればすむのではなく、子どもたちが、日常生活しているその身近な環境づくりとつながってこそ、子どもの輝きを取り戻すことができると思います。

家庭でできること、地域でできること、学校でできることから、子どもたちとともに手をつなぎ、地域の子ども村をはじめていただきたいと思います。

今後の子ども村のゆくへは

かつて、10年目の大きな節目の子ども村は「きくちふるさと水源交流館」を拠点とし、5週間のプログラムを実施しました。清和、杷木、宝珠山、中津江、阿蘇など九州沖縄のまんなかで、たっぷりとした自然とあそび、仲間と楽しく暮らしました。

20周年をむかえた子ども村は、桜竹小学校跡という、温かい地元の方々に見守られて、ゲリラ豪雨や雷などにも安全な、温泉のある拠点と出会いました。

その後は、どのようになっていくのでしょうか？

一昨年は子ども村の参加者たちも、今後の子ども村のことについては、さまざまな意見が寄せられました。多くの子どもたちは、子ども村を続けてほしい、子ども村をつぶさないで……。あにまとして参加した青年たちからは、自分たちで準備してもっと積極的に子ども村を創って生きたい。もっと施設や環境がよくなったほうがよい。世界中の子どもたちが参加できるようになったら……。と夢が膨らんでいきました。

子ども村に送り出してくれた多くの保護者の方々からの継続の期待が寄せられています。

その超えに支えられて、20周年の子ども村は、継続しました。特に、あにまの青年たちの準備から当日までのしっかりした体制が推進してくれました。

このように期待が多く寄せられるものの、継続的に子ども村を続けて行くことには多く

の課題や困難もあります。

特に、子どもたちが安心して参加できるようにするためには、社会的な理解や支援が欠かせません。子ども村とは何なのか？また、子どもたちにとって、青年たちにとってどのような魅力や価値があるのか？など、子ども村の中身を多くの人たちに理解していただく努力が必要です。

また、今後の開催に向けて、子ども村の目的と活動内容を整理し、活動内容や参加者の要求にかなう、空間、施設、体制を準備することが求められています。

①悪天候に対応可能な安全な拠点施設

この数年、特にゲリラ豪雨や落雷など気候変動によって、緊急避難を繰り返してきました。特に、野外を含む体験活動をすすめるためには、適正な安全な拠点施設が必要です。子どもたちの安全を確保するために、最優先でとりくむ課題といえます。

その点から、現在の天ヶ瀬桜竹小学校は、もっともすばらしい拠点といえます。

②子どもの体験を広げる自然環境に恵まれた川や山、広場

子どもたちにとっては、普段触れることのない、自然との出会いや仲間との多彩なあそびは、とても魅力的です。しかし、森や林も荒れたところが増え、また、自然災害や造成などが原因で、土砂の流失などにより、自然環境が劣化し、子どもたちが楽しみにしている河川での遊びもその水質が悪くなり、汚染されているところも増えています。

山や森、河川などでの環境教育の大切さとともに、子どもたちが自然界で思いっきり遊べることが大切で、そのような環境を確保すること、また、保全のための諸活動に参加できるような場所を確保することも重要な課題です。

この点では、新しい拠点になった桜竹小学校の周辺の環境やさまざまな体験の可能性を調査準備することが必要です。

③子どもの体験活動をサポートできるあにまの体制

子どもたちは、年の近い若者との交流やコミュニケーションにより、学校とは異なる異年齢の社会体験を通じて、大きな成長を遂げる機会をつかむことができます。

子どもたちの普段の暮らしの中では、異年齢の集団での体験は少なくなっています。子ども村では、小学3年生（9歳）から中学生の子どもたちと、高校生、大学生、社会人の青年たちが一緒に生活し、活動をすることを大切にしてきました。子どもたちが成長する上で、身近な年長者である青年たちとの暮らしは、将来の自分の姿であり、目標となります。

子どもたちとの有意義な時間を共有することで、青年たちは、大人としての自覚を高め、子どもたちに対して、愛情とやさしさを発揮します。多少の経験の差が、異年齢の集団の力を前向きに高めて行くこととなります。

子どもたちと活動をとともにすすめてくれる若者たちは、国籍を問わず、子ども村には貴

重な存在です。しかし、日本の若者の状況は、子ども村の活動にかかわるには大きな困難を抱えています。特に、若者の雇用環境も厳しく、夏に長期の休暇をとることはほとんど認められていないのが現状です。さらに、最近では、大学の学期の変更により、夏休みが8月中からとなり、子ども村への参加が困難になっています。

やはり、社会全体が、子ども村の内容や価値を理解し、特に若い世代がこれらの活動に参加しやすくすることが、重要であるとともに、企業や大学等も、子どもとの社会活動の意義を受け止めて、青年時代の重要な社会参加活動として、時間等を保障することが求められています。

特に、ネットワークと研修と主体的な参加ができるよう、また、世代が更新することを援助することがもっとも大切だと考えます。

④子どもの体験活動を深める多様な分野のきりり人

子ども村のもうひとつの魅力は、地域のさまざまな経験や技を持っている人々（きりり人）との出会いです。高齢者に限らず、子どもにとっては、さまざまな知識や経験、技能をもった人々との出会いは、生きた教科書として、かけがえのない感動につながります。

自然についての知識や知恵、生活・文化の技術などに深く出会えることは、なかなか機会がありません。自然や社会、人間や生活に深く興味をもち、生きていくための知恵や力を獲得して行くために、さまざまな分野のきりり人の協力が求められています。

その点では、新しい拠点となる天ヶ瀬地域には様々な方々が存在しておられるので、大いに力を発揮していただけるよう協力関係を強めていくことが必要です。

⑤活動を継続できる安定的な拠点とコアチーム

子ども村をこれまで継続して実施できたのは、当初からこの活動を推進してきたメンバーが途切れずに活動できたことが大きな要因のひとつといえます。毎回、実施する中で、子どもの健康や安全、あそびや生活への配慮、施設や環境の整備、人的な配置、緊急時の対応など、これまでの経験を蓄積し、次回に活かすためにこの核となったチームの存在は大きな役割を果たしてきたと思います。

特に、20年にわたって、大きな事故もなく、重要な局面では緊急避難をくりかえしながら、子どもたちの安全と成長を確保してきたことは特筆すべき評価点です。

安全・健康、生活、体験プログラム、施設・衛生管理、資金調達など、実務面での蓄積は、単に知識だけでは補えない、経験が活かされてきたのは重要です。

今後の継続実施を目指すとき、活動を推進するコアチームメンバーの確保と育成がとても重要な課題となります。

20周年は子ども村実行委員会として、青年が実行委員長と事務局長を引き受け、成功に導きました。そのことを発展させ、青年の自主的なチームづくり（実行委員会）と、地元の協力者チーム（地元協議会）と自治体・行政やNPO、助成団体などとの社会的につなぎ実

施をサポートしていく支援チーム（活動支援団体）を確立することが重要になってきます。

⑥活動をすすめるための財源と支援組織

これまで20年の活動を振り返ると、初回の子ども村スタートより、自治体や国により施設や資金、人材のバックアップなどが継続してきたことは大きな支えとなりました。

特に、その中でも重要な役割を果たしたのは、一番身近な地方自治体であったと思います。しかし、この10年間は、地方自治体の町村合併を含む不安定な対応で、子ども村に関しては、地方自治体の窓口が弱くなり、現在では、教育委員会の名義後援とチラシの配布のみになっています。

廃校施設、廃公民館、河川や公園などの施設提供や人的な情報提供など、子どもたちの活動を推進するためには、身近な自治体の窓口の対応が欠かせません。

また、資金面では、当初の都城市の60万円、清和村での毎年の助成金、文部省の委嘱事業として3ヵ年の資金援助、子どもゆめ基金創設による13年間の「助成」による資金援助など公的な助成に助けられてきました。反面、助成による費目や金額のしぼりがあると、活動にふさわしい資金の投入ができなくなったり、謝金の限度額の頻繁な変更により、活動の安定的な継続が危ぶまれたりして、助成のあり方や助成金の使途についての十分な検討が必要です。中身によっては、助成を受けることが望ましくない場合もあるということです。

したがって、上記のような助成の窓口や助成制度の内容をよく見極めたうえで、活動資金を確保しなくてはならないということは、今後の活動を進める上できわめて明確な課題となっています。特に、子ども村事業の内容に賛同していただく、寄付金、協賛金等を確保することが、助成金を獲得する上でも欠かせないことといえます。

また、通年の準備活動が必要であるにもかかわらず、現行の助成制度に見られる、夏の事業のみ対象とし、事務所や運営費、管理費は助成対象外とするようなやり方だけでは、活動は継続できません。そのため、どうしても活動内容を評価し、必要な支援を継続する支援組織を設置することが求められています。

以上の課題を整理しながら、当面25年目の子ども村を実現するための、拠点、人材、施設、財源を開発することで、今後も継続的な実施をめざしていきたいと思います。